

永正一〇（一五二三）年三月三日起日の後柏原天皇主催着到和歌について

——後柏原天皇の短冊詠草を中心に——

本山 八重子

一 後柏原天皇の着到「短冊詠草」

『和歌大辞典』（明治書院）によると、着到和歌とは「和歌詠吟の方法。日次百首、日次和歌とも。一人、または数人が指定の場所（和歌所など）に向いてあらかじめ定められた題によって毎日一首ずつ詠みすすめて満吟する方式。歌数は百首百か日が定式で、始行は正月一日・三月三日・五月五日・七月七日・九月九日など節日からはじめられ、時によっては最終日に饗宴が付け行われることもあった。いつごろから行われはじめたか明らかではないが、すでに明月記建仁元（一一〇一）年八月五日に『於和歌所可著到之由相議』とあるが、これがはたして着到和歌を意味するかは不明。中世を通じて近世に至るまで広く行われたので、それらを収める歌集が多く成立した」と解説されており、夥しい着到歌が残されているということであるが、現在のところ未整理のまま、その全貌は詳らかに

されていない。

今、後柏原天皇の着到和歌に関連すると推定される七枚の「短冊詠草」の写真が手元にある。以下に掲げる通り、七枚とも無記名ではあるが、同一の筆跡と考えられる。一つの題に三首から四首の歌が書かれており、合点や書き込みがほどこされている。この形式から、清書をする前の詠草（草稿）の段階の短冊と推定される。これらの短冊の考察を通して、着到和歌がどのような手順を踏んで行われたかの手掛りの一端を掴むことができれば幸いである。

尚、本文中の短冊の画像は縮小され読みにくいので、文末に比較の大きな画像を掲載しているので参照願いたい。

① 「春雪」短冊詠草について



個人蔵（縦34.3×横5.0㎝）

水の上にくたひうかふ淡雪の消ては春に又やみさらむ
春雪、下折の声をもき、しかけながら松のはかるき春のあは雪

春ふるやとけてなかれんふむ跡にいやかたまれる雪はのこれと

【訳】

水の上にも何度も浮かぶ淡雪は、一度消えた後、春に再び見ないであらうか。

冬の間に下折れの音を聞いた同じ木蔭であるが、今はその松の葉に春の軽い淡雪が降り積もっている。

春に降る「今降る」雪はとけて流れるだろうか、踏む跡にますます固まった（冬の）雪は残るけれど。

右の短冊は「春雪」という題で三首の歌が書かれている。

この短冊については、茶道・江戸千家の機関紙である『江戸千家便覧』（平成八年八月二十五日発行）の中で波多野幸彦氏が、後柏原院の手による「和歌詠草」であり、合点を付された二首目の歌「下折の声をもき、し…」が、永正一〇（一五一三）年三月三日から催された着到百首の内の三月七日の後柏原院の着到歌であることを突き止められている。

「和歌一首を書くのが短冊の通例である」（波多野氏）にもかかわらず本短冊には同一題で三首の和歌が書かれ、真ん中の「下折の

し」に合点が付されている。このように、添削のための詠草が書かれた短冊を、氏は「短冊詠草」と仮称されているので、その用語をそのまま使わせていただく。

また、波多野氏はこの短冊の筆者を後柏原天皇と考える手掛かりの一つに、署名がないことを挙げて、「詠草」というものの性質は、作者が歌会に和歌を提出する時、事前に、自分の詠歌を先輩或いは貴顕の人などに見てもらい、添削なりその意見を聴くものなので、その詠草に自分の名を入れないということは、先方に対して大変失礼になることである。その意味からも、この短冊詠草が筆者に天皇を連想させる一要素でもある」と述べている。

さらに波多野氏は、点者について、「まず頭に浮かぶのは三条西実隆であるので、その日記を見てみると、永正一〇年三月三日のところに『禁裏着到和歌参内書之』とはあるが、添削などのことは何もなく、その日記も三日から十日までの記事であとは欠、四、五、六月も日記は欠であるので、点者のことは今のところ不明である」としている。

『親長卿記』『言国卿記』『実隆公記』『元長卿記』『一水記』『大日本史料』に記録されている「着到和歌」の情報を表（巻末に収録）にまとめてみたが、実隆が後柏原天皇から詠草の相談を受けている記事もあることから、点者が実隆の可能性は高いのではないだろうか。この時の記事ではないが、永正二（一五〇五）年三月三日起日の着到和歌に関して、同七日の『実隆公記』（以下『公記』）と称す

る)の条に「着到御製至昨日三首可拝見之由被仰下、愚意所存以書状申入下」とあり、三月四日、五日、六日の天皇の詠進歌三首に直接添削をほどこすことはせず、自分の意見を書状で具申している。

また、永正六(一五〇九)年九月九日起日の着到では、九月十七日付の『公記』に「御着到御製拝見返上之」とあり、この日も天皇の詠歌を拝見しただけで、添削などほどこさず返上しているごとく、実隆は当該の「短冊詠草」についても、御製に添削を加えることは遠慮して合点だけを付けたものと推定される。

また、通常の添削作法の上からも、撰ばなかった歌に点者が添削を加えることはしないものである。従って、「春雪」の三首目の歌の初句に「今ふるや」という別案を書き入れたのは、短冊筆者自身と考えられる。

波多野氏は、『歴代御製集』から、二首目の「下折の…」の歌が、永正一〇年三月三日から始まった着到百首の五日目の歌であることを探しだされているが、当時の古記録類にも詳しい記事は欠けており、百日間の着到歌の全貌は不明であった。

ところが、二〇〇〇年一月に刊行された『国立歴史民俗博物館蔵貴重典籍叢書』(文学篇 第十一卷)の中に、この時の全着到歌を書写した後柏原天皇自筆とされる、高松宮旧蔵『御着到百首』が収録されており、詳細を知ることができるようになった。

しかしながら、当該の『御着到百首』所収の和歌数は千二百首に及ぶので、本稿ではその詳細には触れず別の機会に検討を加えたい。

永正一〇年三月二日の『元長卿記』には

従明日可有着到和歌、御人數可相催由也、書廻文遣之、

従明日可有着到和哥、御題可為弘長百題、各可被存知様之由、

被仰下候也、

三月二日

冷泉大納言殿

小倉大納言殿

飛鳥井前中納言殿

姉小路宰相殿

中山宰相中將殿

袖書明日各可有御參之由、

其沙汰候也、

と、着到奉行である甘露寺元長は、三月三日の前日に参加者に廻文を回しているが、日記からは五人の参加者の宛所(宛名)しか書かれていないが、後柏原天皇自筆の『御着到百首』により参加者全員を知ることができる。

すなわち、三条西前内大臣実隆・綾小路前権中納言俊量・甘露寺権中納言元長・田向前権中納言重治・三条西権中納言公條・冷泉前参議永宣及び後柏原天皇を含めた一二人の構成である。題は弘長元(一二六一)年に後嵯峨院が召した『弘長百首』による。

ここで、春雪題の個々の歌の意味を押さえ、歌の構成・趣向を検討することを通して、後柏原院の詠進歌が完成・確定する過程を検

討してみよう。同時に、点者が二首目の「下折の声をもき、し…」の歌に合点を付けた理由も考察してみたい。

三首の詠歌は、共通して、めぐりゆく時を視野に入れて「春雪」を詠っているが、それぞれ対比させる対象を変えて、季節の移ろいを表現しようとしている。

一首目の歌「水の上に…」は、水の上の淡雪がいったんは消えても再び来年の春見ないことがあろうかという意味にもとれようが、桜の花びらが水に浮かんだ様子を見立てて、これから咲く桜の花びらが散る様子を思い描いた歌とも解される。「春に又みる」対象が、来年の淡雪なのか、これから咲いて散る桜の花びらなのか決めかねる歌になってしまっている。後者の意味に取った場合、春が始まったばかりの現在と、春酺の未来の時を視野にいれた絵画性豊かな詠歌ではあるが、主題である淡雪よりも想像される桜の鮮やかさのほうが印象に残る歌になってしまったきらいがある。

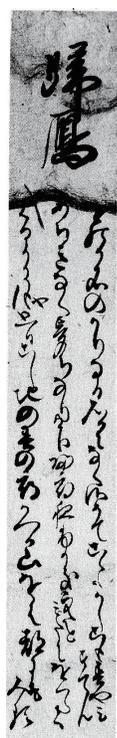
二首目の歌「下折の…」は、下折れを起こす冬の重い雪と春の軽やかな淡雪を対比させることで、冬からいつの間にか春になった時の移ろいを、自然で伝統的な言葉を使っして表現し、眼前の春の淡雪を印象付けている。この詠歌に点者が合点を付けたのは、そのような無理のない趣向を評価したものと推測される。

三首目の歌「春ふるや…」は、二首目の歌と同じく、冬の雪と春の雪を対比させて時の移ろいを詠んでいるが、主題にあたる「雪」を踏み固めているところに優雅ならざる点が認められる。同じ主題

で三首の歌を詠む際に、一首くらはは伝統からやや逸脱した歌も詠んでみようとしている点や、初句に「今ふるや」と題の「春」を回して詠む別案を考えている点などに、後柏原天皇の、歌人としての力量あるいは意欲が看取される。

『御着到百首』によれば、点者が合点を付した「下折の…」の歌が、三月七日「春雪」の着到歌として九首目に詠進されている。

② 「帰雁」短冊詠草について



短冊帖「翰園」所収

をのか名のかりなる道になくさめてこ、もかしこも春やみすてん
帰雁 あちきなく夢ちなりけり帰雁夜ふかき空をみたにをくらて
はるかにも思ひこし地の春の雁かへる山をは都にぞみる

【訳】

自分の名（雁）のようなかりそめの道だとわが心をなくさめて、ここかしこの雁も春を見捨てていくのであろうか。

残念なことに夢の中であった。夜が深い空を雁が帰っていくのを

見送りさえもしないで。

ずいぶん遠くにあるとずっと思ってきた、春の雁が帰っていく越路の還山だが、その山を都で見ることだよ。

一首目の歌「をのか名の…」は、雁の名から「かりなる道」を導きだして、どこもかしこも無常の世なのだとか心を慰めて、春を見捨てて帰って行ってしまう雁を詠んでいる。

二首目の「あちきなく…」は、作者がまだ夢路についている間に、夜深い空を雁が帰ってしまったので、見送りさえも出来なかった無念な気持ちを詠った歌である。

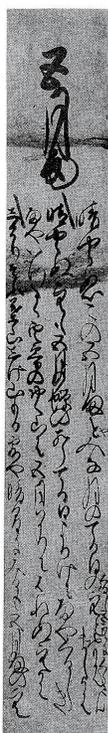
三首目の「はるかにも…」は、雁が目指す「越路」と越前国の歌枕「還山」を詠みこみながら、山を越えて雁が帰っていく眼前の山を「雁がかえる山」と見立てて、ずいぶん遠くだと思ってきた「還山」が都から見えると興じた一首である。帰る雁が遠方ではなく、せめて近くにいるほしいという作者の願望も込められている。

一首目は帰って行く雁の心情を付度してみせ、二首目は作者が知らないうちに帰ってしまった雁を惜しむ気持ちを、三首目は帰って行く雁を眺める歌を詠んでいて、それぞれかなり異なった趣向を詠みわけていることがわかる。点者が三首目を良しとしたのは、「はるかにも思ひこし地の」と伝統的な雅語を用いて、雁の帰る地である固有名詞の「かへる山」を想像させてから、今雁が越えて「帰る山」と普通名詞に転換して、都でも見える山に雁が帰ることを作者

が願っている趣向を評価したものであろうか。初句に「はるかにや」と疑問の「や」の別案も示してあるが、意味が弱くなるので、点者は「はるかにも」の句に合点を付していると推察される。

『御着到百首』では、三月一三日に「はるかにも…」の形で和歌が詠進されている。

③ 「五月雨」短冊詠草について



舟津神社蔵（縦34.7×横5.1浬）

晴やらぬこの五月雨をみな月のてる日くるしき空にくらさんの空とおもはましかは
五月雨、晴やらぬ空も五月の蝉の声てる日よりけに雨やくるしき
雨やいつた、雲霧のおく山は五月はかりにはれぬ空かは
しけりそふ葉山しけ山もる露や晴間にみるも五月雨の空

【訳】

晴れることのないこの五月雨の空を、水無月の照る日の空だと思っただろうであらうか。晴れない空と照り付ける空とどちらがましだらうか。「晴れることのないこの五月雨の空よりは、水無月の

照る日の空に暮らすことにしようか。」

晴れることのない空も、五月の蟬が鳴いているのは、六月の照る日よりいっそう雨が苦しいのか。

雨はいつやむのか。いつも雲霧に覆われた奥山の空は、五月だけ晴れない空ということがあるか、いやいつも晴れることはないのだ。

草木がよいよ茂る葉山繁山の葉から落ちる露は、晴間に見ても五月雨の空のようだ。

本短冊には一つの題に対して四首の詠草が書かれている。一首目と二首目は、ともに「晴やらぬ」と同じ句で詠み始めて、五月雨の空を導き出し、下の句で水無月の「てる日」と対比させている点で、同じ発想の歌となっているが、一首目は五月雨に対する詠者の心情を直接的に詠み、二首目は蟬の鳴き声に託して、五月雨の空の鬱陶しさを印象付ける詠歌になっている。

一首目には、さらに、「てる日くるしき空にくらさん」という別案も添えているが、余情のある「おもはましかは」という原案の方がすぐれているであろう。

三首目と四首目は、ともに話者が山の中にいるという共通の発想で五月雨の空を詠んでいる。三首目の歌は雲霧に覆われた山全体の空を視野に入れて、四首目は「もる露」という句で作者の見える空を限定して、五月雨の空を詠みわけていると推察される。

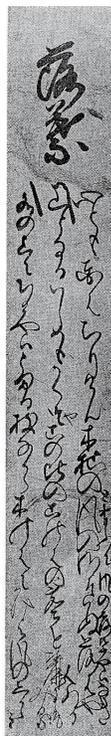
このように四首の詠歌を考察してみると、共通の発想の歌を二首ずつ作った後柏原天皇の意図が見えてくるのではないだろうか。

『御着到百首』を見てみると、「五月雨」の題は三月二八日と二九日と二日間続いたことがわかる。そのため、同じ題で二首詠進する必要があるのでは、同じ傾向の歌をわざと二首ずつ作って点者に撰んでもらおうとしたと思われる。この短冊詠草の四首の歌を作る段階で、二日分の詠進歌を完成させる意図がすでにあつたことが察せられ、着到歌が詠進される手順の一端が窺われる貴重な短冊である。

ちなみに、二首目の「晴れやらぬ空も五月の蟬の声…」の歌は、『柏玉集』第三・夏歌五〇七番に次の形で収録されている。

茂りあふ葉山茂山もる露や晴間にみるも五月雨の空

④ 「落葉」短冊詠草について



『書畫大観』所収

心とも花はちりけん木枯とおもふに風の落葉やはなきの風のさそはぬ落はやはある

落葉 山となるはしめもかくそこの比のこのはの塵を麓にそみる

水の上にちりやはとまる枝なから木のはにかけよ風のしからみ

【訳】

自分の意思で花は散つたのだろうか。木枯らしの風が誘わない落葉があろうか。「木を枯らすものだ」と思うと風の落葉でないものがあるか。すべて風が散らすのだ。」

山となる始まりもこのようであつたのだろうか「か」、この時分の木の葉の塵を麓に見ることだ。

水の上に散り留まることがあるか。枝ごと木の葉に懸けよ。風の柵を。

一首目は、花は自分の意思で散るのかもしれないが、木の葉は、風に誘われて散る運命にあるとして、落葉を惜しむ歌である。添えられた別案では、「木枯し」＝「木を枯らすもの」としての風の性格を強調している。

二首目は、麓に積る落葉を塵に見立てて、塵が積って山となるという仏教の喩えを踏まえた歌である。二句目に「かくや」という疑問の意の別案を添えている。典拠の踏まえ方から見て、「かくぞ」という断定よりは「かくや」という疑問表現の方が穏当な詠みかた

といえるだろう。

三首目は、百人一首の「山川に風のかけたるしがらみは流れもあへぬ紅葉なりけり」などの古歌を踏まえて、木の葉を散らして水面に柵をかけるのではなく、枝ごと木の葉が散らないように、柵をかける風に命じた歌である。木の葉を散らす風に対して、木の葉を散らさないように柵をかける命令したところが新しく、そこが点者に評価されたものと推測される。

「落葉」の題は四月二十六日、二十七日と二日間続くが、合点が付いた三首目の「水の上に…」の歌が二十六日に詠進されている。二首目の詠草にも点が付いているので、二十七日の詠進歌を見ると「飛鳥川ふちは瀬にとや色かはるかつらきやまのこらしのあと」と別の歌が詠進されている。この二首目の詠草の点に限り形が異なっているのは何か意味があるのか。『日本国語大辞典』によると、「へ」の形は長点を意味し、特に優れた歌に懸けられるとしてあるが、それならば、なおさら、なぜ二七日に採用されなかったのか疑問である。

⑤ 「不逢恋」短冊詠草について

『御着到百首』によると、「不逢恋」の題は、五月七日から一日まで五日間続いている。「不逢恋」の短冊詠草は二枚伝わっているので、まとめて考察することにする。

「不逢恋」短冊 その一



陽明文庫蔵

恋こゝろなりてよく
無正体むせい口くち候
恋こゝろといへはこれそよのつね身にかきまる
不逢恋
は、き、のよそめはかりにみてもうし一夜ふせ屋のかけもしらすれすて
此題五首のうち
われにこそつれなき色の常盤山よそのもみちはいか、とぞ思

二首にても
合点候へく候

【訳】

恋と言えは「いうものは」、これぞ世の常のことであるが、むなししい思いであるとしても「自分だけの思いであるとしても」どうすることもできない。

姿は見えるが会えないという箒木のように、よそ目だけ見てもつらいばかりだ。「よそ目だけで終わってしまい」、「一夜の共寝も全くかなわない「ままで」。

私にだけつれない様子の常盤山のようなあなただが、よその人には木の葉が紅葉するように態度を変えてなびくのであろうか。

一首目は、思うようにならない恋のもどかしさを、世の常のことであり、はかないことであると認識しながらも、嘆かずにはいられない心情を詠んだ歌である。

二首目は、「そのはらやふせ屋におふるははきぎのありとはみえてあはぬきみかな」（新古今集・恋一・九九七・坂上是則）を本歌として踏まえながら、姿を見たことはあっても逢瀬を遂げられないつらさを詠じている。

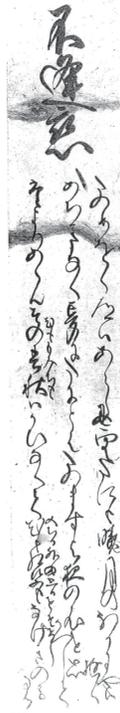
三首目は、常盤山によって自分になびかない女を象徴させ、よその男になびく姿を紅葉に喩えた、少し皮肉を含んだ詠歌に作ってみせている。

三首ともに合点が付され、一首目の歌は七日、二首目の歌は一日、三首目は八日の着到に詠進されている。一首目の歌は、「恋といふ」、「身にかきる」という別案にも合点があり、その別案の形が採用されている。二首目も合点がほどこされた「道たえて」と「しられす」という別案の方が選ばれている。この事からも、点者はあくまでも合点だけを付けて添削はしていないことがわかる。

この短冊詠草には、和歌三首のほかに、短冊の上の余白に「恋になりていよく、…」と恋の部立になって、いよいよ歌を作ることが覚束なくなってきたことと、「不逢恋」が五首続くので、一、二首でも合点してほしいという文章も記されている。これが難儀をすなおに表明したものか、それとも謙遜なのか定かではないが、いづれにしても天皇の人間味が垣間見える興味深い短冊である。

ちなみに、二首目の歌は『柏玉集』恋歌・一三二四番に「ははきぎのよそめばかりに道絶えて一よふせやのかけもしられず」という形で収録されている。

「不逢恋」短冊 その二



個人蔵 (縦34.7×横5.3 糶)

たのめをく道はあらしに雲たにも暁月のほかにやはゆく
不逢恋、あちきなく夢にたにはたのますよ夜の衣を思かへして
たよりあらんその春秋はかひなくて花も紅葉もなけきの色なる
花もみちも 又ちる外の思ひをせし

【訳】

逢つてくれると私に頼みにさせる通い路は現実のものとはならないだろう。山風によつて雲さえも明け方の月から離れていくのか。せめて夢だけでも逢いたいなど、つまらない望みをかけたりしないよ。夜の衣を返すのを思い直して、現実逢えることだけを願っているのだ。

期待できそうな春も秋もかいがなくて、花も紅葉をみても嘆きの

色である。「期待できそうな花も紅葉もかいがなくて、また、散る嘆き以外の嘆きを重ねてしまったことだ。」

一首目は、逢うことを期待させられたがどうせかなわないだろうと思い、山風によつて雲が明け方の月から離れていくように、あの人私も私から離れていくのだろうと嘆いている。

二首目は、せめて夢の中であの人に逢おうと、夜の衣を返して寝ようとしたが、夢で逢ってもしかたがない、現実逢えることだけを願おうと、思い直した複雑な心境を詠んでいる。

三首目は、春が来たら「花が咲いたら」逢いましょう、秋が来たら「紅葉したら」逢いましょうと約束してくれたのに、その季節になつても逢つてくれず、花や紅葉が嘆きの種になつてしまった心境を詠んでいる。

点者が二首目の歌を撰んだのは、伝統的な「夜の衣を返す」発想によりながら、それを反転させて深い嘆きを詠んでいる点を評価したものと想われる。なお、「あちきなく…」の歌は五月九日の着到に詠進されているが、ここで、着到歌は果たして毎日詠進されたのかという疑問が生じる。

其の一の短冊で考察した三首の和歌は、一首目が五月七日の着到歌、二首目が五月一〇日の分、三首目が五月八日の詠進歌である。毎日必ず詠進されたものなら、其の二で取り上げた歌は、五月一〇日以降に詠進されなければならないのではないか。ただし、其の一と

其の二の短冊詠草が、同じ日に一緒に点者の元に届けられた可能性もあるので検討の余地がある。実際には毎日詠進したのか、あるいは、何日かまとめて詠進することもあったのか、当時の廷臣の日記で調べてみることにする。

例えば、文明七（一四七五）年三月三日起日の着到百首の詠進について、『親長卿記』には次のような関連記事がある。

三月 三日 参内、自今日百日可有日歌、可詠進云々、始終之儀雖不存知、可詠進之由申之、於御前御料紙・籤等予調之、依仰也、御前着到十人也、

一四日 参内、兩三日（着到）和歌今日書之、

一五日 参内、書日歌已上三首

一七日 参内、書日歌二首

廿日 参内、書日歌、明日坂本下向事申暇了、

廿八日 自坂本帰京、参内、書日歌、

六月一四日 参内、今日百日御歌結願日也、各御銚子申沙汰、次有当座二十首、有披講、

この記事を見る限り、毎日ではなく、二、三日分をまとめて詠進しているようである。しかも、かなり遅れ気味であることがわかる。その間には京都に不在の日も何日もあり、初日には「始終之儀雖不存知、可詠進之由申之」とあるので、毎日必ず詠進しなくてもよい

体制が組まれていたようである。ただし起日と満願日だけは全員参加が原則であった可能性がある。

『実隆公記』を見てみると、文明八（一四七六）年三月三日起日の勝仁親王（後柏原天皇）主催の着到百首で、

三月 三日 自今日若宮御方御着到和歌、被遊之、可詠進哉之由勅定之間、畏入之由申入了

四日 晚参内、御着到和歌、昨日今日之分書之、

とあり、四日に二日分の歌を詠進しているが、実隆の参加は急遽決まったようにも取れるので、初日は全員詠進が決まりであるが、例外的に詠進が翌日になってしまった可能性もある。

同記文亀三（一五〇三）年三月三日起日の着到和歌では、

三月 三日 及晚参内、着到和歌持参之、入夜被召三間庇、御製拜見之、愚存之旨言上之、則被遊之、着到籤依仰染愚筆了、於内々番衆所各書之、御人数十人、御製・伏見殿・下官・右衛門督・按察・勸中・甘中・源中・賢房朝臣・濟繼朝臣各書了、賜一盞了、

一〇日 着到和歌自五日至今日六首書之、
六月一四日 今日着到和歌終功之間、各進上一桶一両種、

とある。三月三日の起日には全員が自分の詠進歌を持参して、内々番衆所に備えられた料紙に、官位の順に歌を記入し、天皇の命令により題簽（外題）は実隆が染筆していること、三月五日から一〇日までの着到歌を一〇日にまとめて六首詠進していることがわかる。最終日には参加者全員が酒と肴を進上して竟宴が催されたと推量される記事もある。

中でも、文亀三（一五〇三）年九月九日起日の着到和歌の記には、興味深い記事が散見する。

九月 九日 自今日着到和歌等事談之、菅宰相來臨、及晚御製共有被談事、参内、御詠草付新典侍局進上、入夜於内々番衆所着到和歌各書之、今度人数御製之外十人也、各書了後有一盞事、

一七日 着到御製御談合、愚意所存申入了、

二二日 着到和歌書之、御製一両首御談合、折節愚意所存申之、頗有叡感之氣、

一〇月三〇日 着到隣擣衣歌・閑居之月所書之、不可説違失也、今日勸修寺來臨、谷紅葉歌・落葉之由存之、書違之由被命、誠被切続了、明日可切続之由勅定間、不及改之、

一二月一九日 今日着到和歌結願也、仍午後参内、則依召参御前、

百日無為珍重、殊更御製連日被仰談、御祝着之由勅定、尤畏申也、其後於殿上、中山中納言等此間相積之分書之、則参番衆所、

祝言歌各次第書之、下官・民部卿・右衛門督・按察・中山中納言・勸修寺中納言・源中納言・菅宰相・右兵衛督・濟繼朝臣等也、有小盃酌事。

九日の日記では、天皇から御製の相談を受け、その御詠草を女官を通して返上するという記事があるが、この詠草が短冊詠草なのかどうか書かれていないのが残念である。初日には参加者全員が参内して、内々番衆所に設けられた料紙に御製が書かれた後、各自の和歌を官位の順に記載する。最後に一献を傾けるのが通例であることがわかる。一〇月三〇日の記事は、「谷紅葉」と「落葉」の歌を書くべき所に、「隣擣衣」と「閑居之月」の歌を書いてしまった。すなわち、書き損じた場合は、その部分を切り継ぎしたことがわかる。また、結願日の一二月一九日の記事からは、未着到の和歌をまとめて詠進する中山中納言、百首目の「祝言」の歌を参加者全員が官位の順位に従って記入していること、最後に宴を催すのが定例であることが推量される。

⑥ 「逢不会恋」 短冊詠草について



個人蔵（縦34.1×横5.2㎝）

逢不 なき名そといはむ契はかそとはれては口きよからぬこたへなからも
会恋 しの薄しのふかたにはいつなりて逢坂山に秋かせのふく
たか為か人わらへなるさまくに心かへして又そつれなき

【訳】

事実無根だと言う約束であるよ。「言うしかないよ。」誰かに問われたら嘘を答えることになるのであるが。

いったん逢瀬を遂げたのに、いつの間に逢坂山に秋風が吹いて、私に飽きたあの人を恋いしのぶようになってしまったのか。

誰のせいで私は人に笑われることになるのか。あの人はずさまに心を変えて、一度は逢ってくれたのに、また冷たく逢ってくれなくなってしまった。

一首目の歌は、逢瀬を遂げたものの事情があつて二人の関係を隠したまま、その後二度と会うことのない恋を詠っている。ここで、「契」の語は、逢瀬の意に加えて、噂は事実無根であると口裏をあ

わせようという「約束」の意も兼ねているところが趣向になっている。別案として添えられた「ばかり」は、より素直な表現になり、かつ別れざるを得なかった事情を余情として感じさせる効果を狙っている。

二首目は、下の句の情景によって、一度は逢瀬を遂げながら、男に飽きられて、逢つてもらえなくなった嘆きを暗示している。点者が合点を付けたのは、「逢不会恋」の題意を、情景に託して表現した点が巧みであると評価したためであろう。

三首目の詠草は、心の定まらない女に翻弄されて、人の笑い物になってしまった男の嘆きの歌である。相手の女に対する恨みを直截に詠じていて、二首目の歌と好対照をなしている。

「逢不会恋」の題は、五月一五日、一六日、一七日、一八日、一九日と四日間続く。『御着到百首』により、この「しの薄」の歌は五月一八日に詠進されていることがわかる。

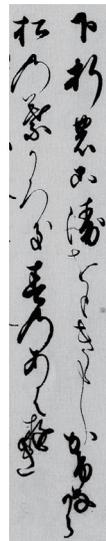
後柏原天皇の私家集である『柏玉集』恋下には、最後の句が「あき風のふく」ではなく「あき風のふく」で収録されているが、「あき（飽き）風」でなければ意味をなさないので誤写と考えられる。また、『柏玉集』五百首下では「いつなりて」が「いひ成して」になっているがこれも誤写であろう。さらに、全く同じ「しのす、き」の歌が、三条西実隆の私家集『雪玉集』にも収録されている。この歌は短冊詠草及び『御着到百首』から後柏原天皇の歌であることは明らかであり、その混入の事情については、後に考察を加える。

手元にある「短冊詠草」の資料はわずか七枚にすぎないが、関連の短冊詠草が百枚近くあった可能性も否定できない。一題に対し三首から四首の歌が書かれていることから、一回の着到百首のために三百首の和歌を作ったことも想定される。他の公務を果たしながら、百日間ほぼ毎日、三四首の歌を構想に沿って、かなり自在に詠み分けることができた点で、天皇が和歌に対して相当な技量を備えていたことが窺えよう。

二 後柏原天皇の書について

今まで考察してきた七枚の「短冊詠草」は、はたして後柏原天皇の自筆と結論付けてよいのだろうか。和歌自体は『御着到百首』や『柏玉集』に収載されていることから、天皇自身の御製であることは明白であるが、短冊詠草は別人が書写することもできるから検討が必要である。幸いなことに、短冊詠草の合点が付された七首の歌が、後柏原天皇自筆の『御着到和歌』に収録されているので比較してみることにする。右が「短冊詠草」の書、左が『御着到百首』の書である。

「春雪」



「帰雁」



「五月雨」

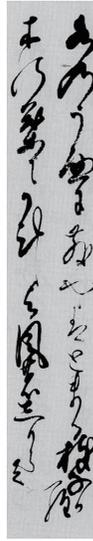
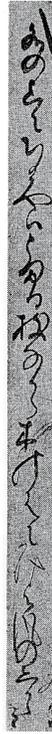


「五月雨」

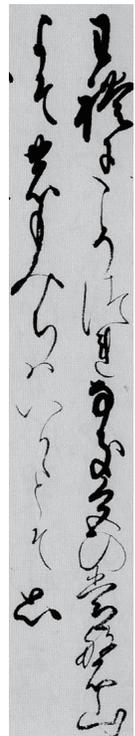
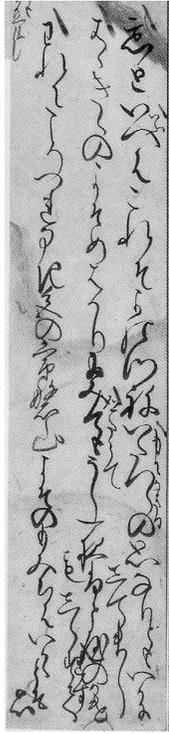




「落葉」



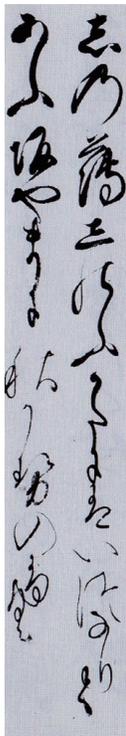
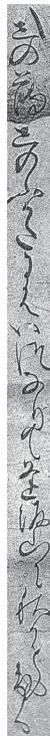
「不逢恋」



「不逢恋」



「逢不会恋」



「短冊詠草」および『御着到百首』の書体とも、一字一字を、筆を捻り気味に矯めながらも運筆が正確で、強弱のある少し右下がり
に連綿する書体であるのが共通してみられる。縦三四糎・横五糎の
小さな短冊に、三首から四首の和歌を字配りよく、余白の過不足な
く一瞬で書き上げるには相当な書の技量が必要であり、自作の歌だ

からこそ一気呵成に書くことができよう。写し物であれば、不自然な運筆の跡や歌の収まりの悪さ・連綿の不自然さが現れるものであるが、当該の短冊詠草の書は全く自然な流れで破綻なく書かれ、美しくもある。自筆としてよいものではないだろうか。

下書きである短冊詠草には、一首の歌が生れる過程で何首もの詠草が作られ捨てられた事、点者または添削者の有無、場合によっては、作者の歌の構想や意図も掬いあげることができ、書の技量の大きさをさえも知ることができる。草稿段階の短冊詠草にこそ読みとるべき豊富な情報が含まれていることに気づかされる。短冊詠草はこの時の着到百首に限ったものなのか、また、後柏原天皇以外の短冊詠草はあるのかなど今後の課題は尽きない。

三 三条西実隆の私家集『雪玉集』に混入している

後柏原天皇の和歌について

『雪玉集』卷十七・百首・春廿首「初春」の題から始まり「祝」の題で終る百首歌は、十九首以外は、本稿で取り上げている永正十三年三月三日起日の高松宮旧蔵『御着到百首』所収の実隆自身の着到百首に該当するので、この時の百首であると考えられる。では、なぜ十九首の他人の歌が紛れこんだのか。また、その混入歌の作者は誰なのかを考察する。その前に、『雪玉集』の概要を述べておく。

『雪玉集』の所収内容は複雑に入り組んでおり、『和歌文学辞典』

によると

版本は一八巻、総歌数八二〇二首（重出歌・他人歌約一三三〇首を含む）。卷一〜六は部類歌で春・夏・秋・冬・恋・雑各一本」と注されており、「異本」による編成）、卷一八は「御本之外随求出書之」とあり、未収散在歌を収集部類した巻。（以下略）

とあるように、『雪玉集』卷十六・十七は別本に該当するということである。

『私家集大成』（V下）に収録されている『雪玉集』の解説では、板本と配列を異にする異本系写本として

北岡文庫蔵「瑤雪集」・「逍遙院殿御詠草」書陵部蔵「逍遙院内府百首」・「詠百首和歌」・「逍遙院百首」彰考館蔵「逍遙院瑤樹抄」龍谷大学図書館蔵「実隆公百首集」などを挙げている。

『雪玉集』に混入している十九首の歌は次の通りで、作者に関しては高松宮旧蔵『御着到百首』の歌と照合すると、十八首が後柏原天皇であり、一首が下冷泉政為であることがわかる。

7370 霞 しらなみのはなともいはいせの海やかすむみるめ
を家づとにせん（後柏原天皇）

7381 花 みよしのの岩のかけ道花ゆゑにふみならしても世を

- ぞわするる（後柏原天皇）
- 7 3 8 3 花 山かぜのはなやいづくに落滝つこのころこずゑを水上にして（後柏原天皇）
- 7 3 9 1 郭公 五月まつ御はしのはなにほととぎすこぞともいはじよよのふるごゑ（後柏原天皇）
- 7 3 9 4 五月雨 はれやらぬ空も五月のせみのこゑてる日よりけに雨やくるしき（後柏原天皇）
- 7 4 1 0 月 しるべしていざとやいひし空の月ゆくゆくみれどあふ人もなし（後柏原天皇）
- 7 4 1 2 月 山にてもとどめぬ月のうらみのみまさきの月のよるよるのかげ（後柏原天皇）
- 7 4 1 6 紅葉 下もみちそむる雫は松杉のあるよりいでてあをき色かは（後柏原天皇）
- 7 4 2 1 落葉 あすか川ふちはせにやと色かはるかづらきやまの木からしのあと（後柏原天皇）
- 7 4 2 6 雪 それとみる雪のとはじまくる日にしろく立つらん波もわかれず（後柏原天皇）
- 7 4 3 0 忍恋 かばかりにしのおはふかき心ともしられむかたにしられぬもうし（後柏原天皇）
- 7 4 3 2 不逢恋 おもふことかはるならひをたのむかなあかざらましをみにはさだめて（下冷泉政為）¹²
- 7 4 3 3 不逢恋 命にぞまかせはつべき今更におもひたえんもあ
- さきこころを（後柏原天皇）
- 7 4 3 9 遇不逢恋 しのすすきしのおかたにはいつなりてあふさかやまにあきかぜぞ吹く（後柏原天皇）
- 7 4 4 1 遇不逢恋 としもへぬこの世ながらの人をしもふるきまくらにしきしのびつつ（後柏原天皇）
- 7 4 4 4 忘恋 したがふに¹³いふにはあらでなにをかはたよりになしておどろかさまし（後柏原天皇）
- 7 4 5 4 旅 心より袖にわすれむしづくかは野山のつゆは分けつくしても（後柏原天皇）
- 7 4 5 7 山家 人もこそおくれじといひし山ずみよ我さきだちてあるじがほなる（後柏原天皇）
- 7 4 6 0 述懐 立ちかへりうらやましきは末のよにあへるをみちとおもふのみなる（後柏原天皇）
- 『私家集大成』の「雪玉集」の解説によると、「総歌数は八二〇二首であるが、定数歌において三箇所重出（七〇首）がある。贈答や寄書などの他人の歌が、部類・定数歌で九六一首。さらに『聴雪和歌抄』（北岡文庫、午・三六・六印）のように、実は公条の着到百首三種が誤られて、卷十六の⑤・⑥・⑦に入っている（公条家集参照）。総計「一三三一首」とあるので、当該の十九首は実隆の歌とされたままで、一三三一首の混入歌の数には含まれていないことになる。

では、当該の十九首が実隆の歌に混入した理由にどの様なことが考えられるであろうか。

残念なことに、『実隆公記』には、永正十年三月三日の着到和歌に関する記事は、三日の「禁裏着到和歌参内書之」とあるのみであり、後柏原天皇の「短冊詠草」の点者は実隆の可能性が高いと推定されるのみで、裏付ける資料はない現状であった。

しかしながら、この時の実隆の着到百首に十八首の後柏原天皇の歌が混入していること、および、混入歌の題は単独のものではなく、複数日に渡るものであることから、後柏原天皇の詠草のなんらかの下書きが実隆の手元に残され、実隆の歌を後世家集に編集した時、

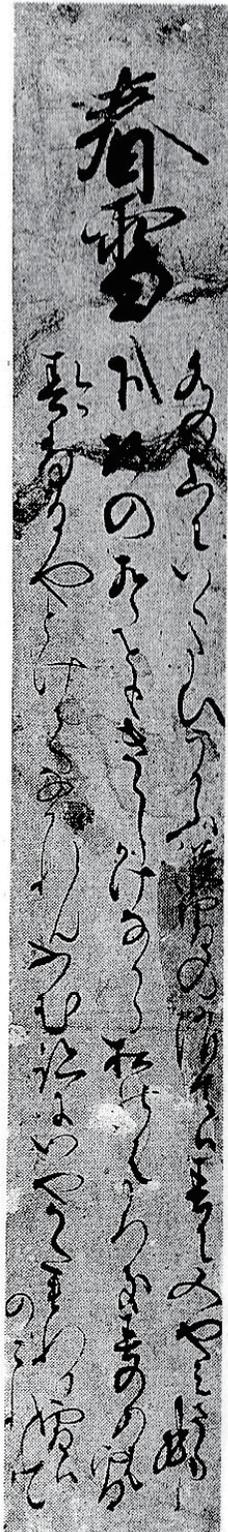
それが混入した可能性が考えられるのではないか。そうだとすれば、そのことは、後柏原天皇の「短冊詠草」の点者が実隆であることを裏付けることにつながる。

さらに、既存の七枚の「短冊詠草」のほかに、「霞」・「郭公」・「月」・「紅葉」・「雪」・「忍恋」・「忘恋」・「旅」・「山家」・「述懐」の「短冊詠草」が、少なくとも存在していたのではないかと推測されよう。

また、五首の「不逢恋」の中、一首に下冷泉政為の歌が混入していることは、政為も実隆に添削または点者を依頼していた可能性を想像させるが、もとよりそれを裏付ける資料はいまのところ何もない。

【図版】

「春雪」短冊詠草

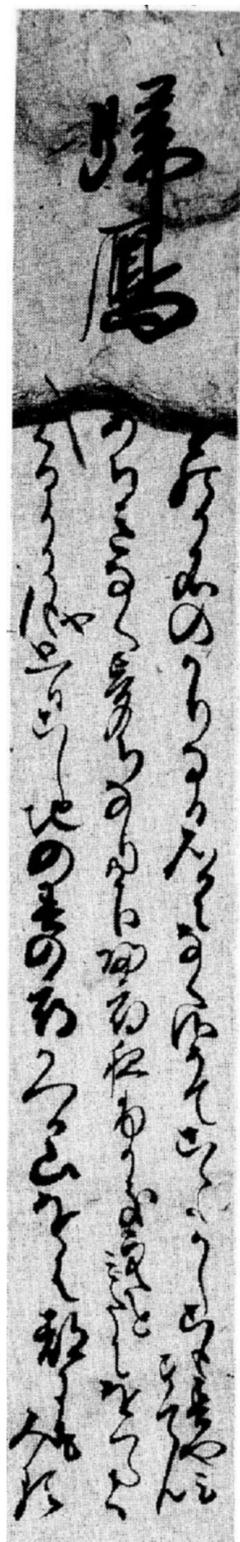


個人蔵（縦34.3×横5.0糎）

水の上にくたひうかふ淡雪の消ては春に又やみさらむ
春雪 下折の声をもき、しかけなから松のはかるき春のあは雪

春ふるやとけてなかれんふむ跡にいやかたまれる雪はのこれと

「帰雁」 短冊詠草



短冊帖『翰園』所収

帰雁

をのか名のかりなる道になくさめてこ、もかしこも春やみすてん
あちきなく夢ちなりけり帰雁夜ふかき空をみたにをくらて
はるかにも思ひこし地の春の雁かへる山をは都にそみる

「五月雨」 短冊詠草



舟津神社蔵 (縦34.7×横5.1糎)

五月雨

晴やらぬこの五月雨をみな月のてる日の空とおもはましくろしき空にくらさんかは

晴やらぬ空も五月の蟬の声てる日よりけに雨やくるしき

雨やいつた、雲霧のおく山は五月はかりにはれぬ空かは

しけりそふ葉山しけ山もる露や晴間にもるも五月雨の空く

「落葉」 短冊詠草

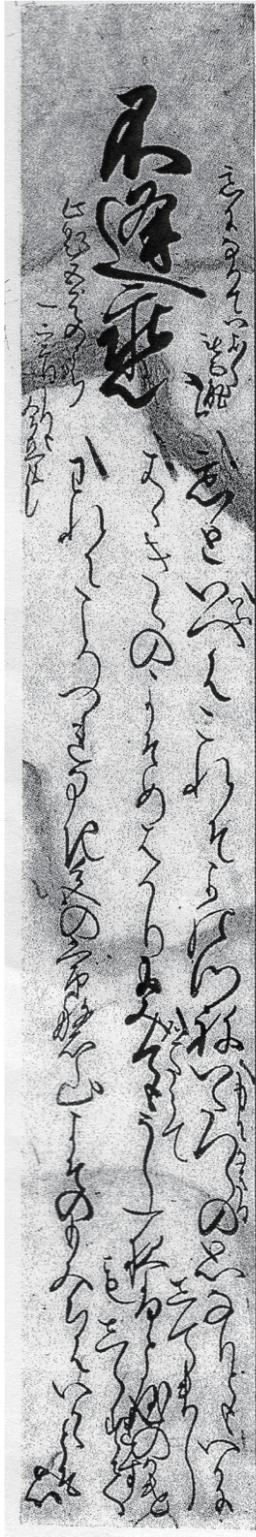


『書畫大観』所収

心とも花はちりけん木枯とおもふに風のさそはぬ落はなはやはある

落葉 山やまとなるはしめもかくそこの比やのこのはの塵を麓ふもとにそみる
水の上みづの上にちりやはとまる枝えだなから木きのはにかけよ風かぜのしからみ

「不逢恋」短冊詠草 その一



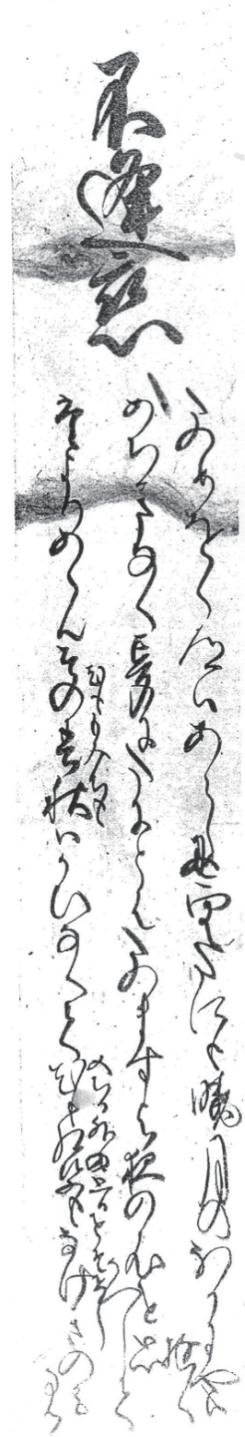
陽明文庫蔵

恋こひになりいよく無正体むせいだい□候
恋こひといへはこれそよのつねみいたつらの思おもなりともいかにしてまし（6）

不逢恋
は、き、のよそめはかりにみてもうし一夜ふせ屋やのかけもしらす（7）
われにこそつれなき色の常盤山とこよそのもみちはいか、とぞ思（8）

一二首にても
合点候へく候

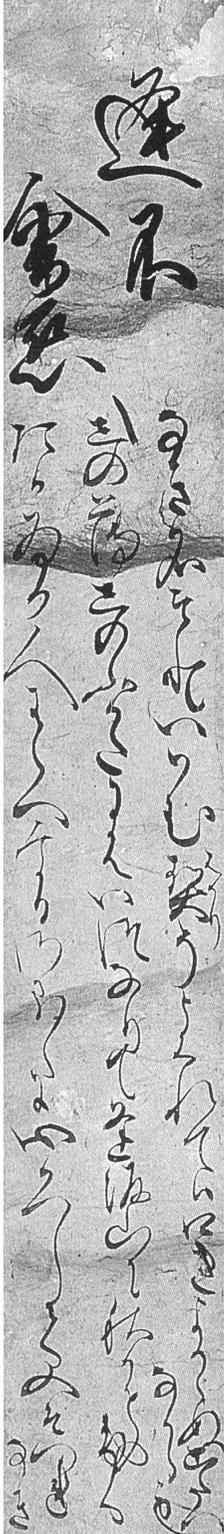
「不逢恋」 短冊詠草 その二



個人蔵 (縦34.7×横5.3 糎)

たのめをく道はあらしに雲たにも暁月のほかにやはゆく
 不逢恋 あちきなく夢にたにとはたのますよ夜の衣を思かへして^⑨
 たよりあらん^{花もみちも}その春秋はかひなくて^{又ちる外の思ひをせせし}花も紅葉もなけきの色なる

「逢不会恋」 短冊詠草



個人蔵 (縦34.1×横5.2 糎)

逢不

なき名そといはむ契はかりそとはれては口きよからぬこたへなからも

会恋、しの薄しのふかたにはいつなりて逢坂山に秋かせの10ふく

たか為か人わらへなるさまく心に心かへして又そつれなき

注

(1) 『国立歴史民俗資料館蔵貴重典籍叢書』文学篇第十一卷(中世定数歌)所収

の『御着到百首』(以下「高松宮旧蔵『御着到百首』」)の三月七日「春雪」に収録。

(2) 高松宮旧蔵『御着到百首』の三月十三日「帰雁」に収録。

(3) 高松宮旧蔵『御着到百首』の三月廿九日「五月雨」に収録。

(4) 高松宮旧蔵『御着到百首』の三月廿八日「五月雨」に収録。

(5) 高松宮旧蔵『御着到百首』の四月廿六日「落葉」に収録。

(6) 高松宮旧蔵『御着到百首』の五月七日「不逢恋」に収録。

(7) 高松宮旧蔵『御着到百首』の五月十日「不逢恋」に収録。

(8) 高松宮旧蔵『御着到百首』の五月八日「不逢恋」に収録。

(9) 高松宮旧蔵『御着到百首』の五月九日「不逢恋」に収録。

(10) 高松宮旧蔵『御着到百首』の五月十八日「逢不恋」に収録。

(11) 第四句の「月」、高松宮旧蔵『御着到百首』所収歌は「つな」。

(12) 第四句の「あかざらまし」、高松宮旧蔵『御着到百首』所収歌は「あはざらまし」。

(13) 初句の「したがふ」、高松宮旧蔵『御着到百首』所収歌は「したふ方」。

(14) 第三句の「よ」、高松宮旧蔵『御着到百首』所収歌は「に」。

【謝辞】本稿執筆にあたり、短冊の画像掲載を快くご許可下さいました陽明文庫、舟津神社を初め、各ご所蔵者の皆様に厚くお礼を申し上げます。

(もとやまやえこ 大学院博士課程後期課程在学)

後土御門・後柏原・後奈良院時代の着到百首

年	開始日	終功日	題(題者)	主催者	文献
文明4年	9月9日			後土御門天皇	親
文明7年	3月3日	6月14日		後土御門天皇	親・実・言
文明7年	3月3日	6月14日		勝仁親王(後柏原天皇)	親・実
文明7年	9月9日	12月19日		後土御門天皇	実
文明8(1476)年	3月3日	(6月17日)		勝仁親王(後柏原天皇)	実
文明9(1477)年	3月3日	(6月14日)	(三條西実隆)	勝仁親王(後柏原天皇)	実
文明9(1477)年	9月9日	12月19日		後土御門天皇	親・実
文明10(1478)年	9月9日	12月19日		後土御門天皇	言
文明10(1478)年	9月9日	12月19日		後土御門天皇	言
文明11(1479)年	9月9日	(11月20日)		後土御門天皇	大日本史料
文明11(1479)年	9月9日	(11月20日)		勝仁親王(後柏原天皇)	大日本史料
文明12(1480)年	9月1日	12月11日		勝仁親王(後柏原天皇)	大日本史料第8編12 P514、親・実・宣
文明12(1480)年	9月1日	12月11日		勝仁親王(後柏原天皇)	大日本史料第8編12 P514、親
文明13(1481)年	9月1日	(12月12日)		後土御門天皇	大日本史料第8編13 P567
文明13(1481)年	9月9日	12月20日		勝仁親王(後柏原天皇)	言
文明14(1482)年	9月9日	12月20日		勝仁親王(後柏原天皇)	言
文明15(1483)年	3月3日	6月13日		後土御門天皇	大日本史料第8編15 P272
文明17(1485)年	9月10日	12月19日		勝仁親王(後柏原天皇)	実
文明18(1486)年	9月9日	12月18日	弘長百首題	勝仁親王(後柏原天皇)	実
文明19(1487)年	3月3日	(6月14日)	一字題(飛鳥井栄雅)	勝仁親王(後柏原天皇)	実
長享3(1489)年	9月9日	(12月20日)		後土御門天皇	実
延徳3(1491)年	(8月9日)	11月20日		後土御門天皇	実
明応2(1493)年	3月3日	5月15日(閏2月あり)	定家結題	勝仁親王(後柏原天皇)	実
明応7(1498)年	3月3日			後柏原天皇	言
文龜3年	3月3日	6月14日		後柏原天皇	実・元
文龜3年	9月9日	12月19日		後柏原天皇	実
永正2(1505)年	3月3日	6月14日	四文字結題	後柏原天皇	実・二
永正5(1508)年	9月9日	12月20日		後柏原天皇	実
永正6(1509)年	9月9日	12月20日	結題	後柏原天皇	実・続々群書類従
永正7(1510)年	9月9日	12月19日		知仁親王(後奈良天皇)	実・二
永正8(1511)年	3月3日	6月14日		後柏原天皇	実
永正8(1511)年	3月3日	6月14日		知仁親王(後奈良天皇)	実
永正10(1513)年	3月3日	6月14日		後柏原天皇	実・二
永正14(1517)年	3月3日	6月13日		後柏原天皇	二
永正16(1519)年	3月3日	6月14日		後柏原天皇	二

注：文献欄の親は『親長御記』、実は『実隆公記』、言は『言国御記』、二は『二水記』を表す。